

6. 曜日別の受診患者数では日曜日が1,214人(26.7%)と最も多く、次いで土曜日が880人(18.6%)と多く、いずれも週末に集中する傾向が見られた。

7. 疾患別の受診患者数では次の順に受診人数が多かった。  
歯周組織疾患1,192人(根尖性歯周炎967人, P急発225人) う蝕・歯髄疾患1,032人(歯髄炎742人, う蝕290人) 炎症587人(智歯周囲炎320人, 膿瘍170人, 骨髄炎49人, 上顎洞炎36人, 歯肉炎12人) 外傷534人(歯牙脱臼195人, 軟組織損傷169人, 歯牙破折104人, 骨折52人, 打撲14人) 補綴物脱離482人 抜歯後疼痛・出血・感染451人(疼痛が212人, 出血が187人, 感染が52人) 矯正装置脱離96人 義歯破折87人 顎関節疾患68人(顎関節症41人, 顎関節脱臼27人) インレー脱離64人 粘膜疾患25人(潰瘍13人, アフタ5人, びらん4人・カンジダ症3人) 口腔内出血23人 異物18人 神経性疾患13人(三叉神経痛10人, 顔面神経痛3人) ウイルス性疾患8人(帯状疱疹6人, ヘルペス2人) 薬疹6人 その他43人である。

座長 兼松 宣武 教授

## 7. 口腔領域感染症の原因菌とその抗菌薬感受性

○岩島 広明・田中 四郎・毛利 謙三・桑島広太郎  
笠井 唯克・江原 雄一・森 靖博・藤本 雅子  
広瀬 尚志・兼松 宣武

(朝日大学歯学部口腔病態医療学講座

口腔外科学分野)

1998年4月から2001年3月までに朝日大学歯学部口腔病態医療学講座口腔外科学分野(歯科外科学)を受診した9歳から82歳の患者113人において顎口腔領域感染症の閉鎖膿瘍から分離された細菌とその抗菌薬感受性について検討した。

今回用いた抗菌薬は17種類で、ペニシリン系抗菌薬としてベンジルペニシリン(PCG), アンピシリン(ABPC), ピペラシリン(PIPC), セフェム系抗菌薬としてセファロリジン(CER), セファクロル(CCL), セフメタゾール(CMZ), セフジトレンピポキシル(CDTR-PI), セフトラジシム(CAZ), セフテラムピポキシル(CFTM-PI), フロモキシム(FMOX), カルバペネム系抗菌薬としてイミペネム(IPM/CS), マクロライド系抗菌薬としてクラリスロマイシン(CAM), リンコマイシン系抗菌薬としてリンコマイシン(LCM), テトラサイクリン系抗菌薬としてミノサイクリン(MINO), アミノグリコシド系抗菌薬としてトブラマシム(TOB), ホスホマイシン系抗菌薬としてホスホマイシン(FOM), ニューキノロン系抗菌薬としてオフロキサシン(OFLX)を用いた。

113症例中、培養陽性症例が53症例(46.9%)であり、総計74菌株が検出された。その内訳は、好気性菌では、グラム陽性球菌である $\alpha$ -streptococciが最も多く14菌株(18.9%)で、グラム陰性桿菌のHaemophilus parainfluenzaeが4菌株(5.4%), グラム陰性球菌のNeisseria属菌3菌株(4.1%)がみられ、その他抗菌薬感受性の低い菌が3菌株であった。

嫌気性菌では、グラム陽性球菌であるPeptostreptococcus属菌が26菌株(35.1%)と最も多く、ついで非黒色素産生性グラム陰性桿菌13菌株(17.6%)や黒色素産生性グラム陰性桿菌4菌株(5.4%)が検出された。

好気性菌に対する抗菌薬の感受性は、IPM/CSはすべての菌株に対して抗菌性を示した。また、OFLXは93.3%, PCG以外の $\beta$ ラクタム系抗菌薬およびMINOでは83.3~93.3%の高い抗菌性を示している。しかしながらPCG, TOB, CAM, LCMなどの抗菌薬は66.7~76.7%と低く、FOMでは46.7%と低い値を示した。

嫌気性菌に対する抗菌薬の感受性は、PIPC, FMOX, IPM/CSおよびOFLXは95.5~100%の高い抗菌性を示し、ついでCMZ, LCM, およびMINOは93.2%と高い抗菌性を示した。ABPC, CDTR-PI, CFTM-PI, CAMの抗菌性は、77.3~86.4%であった。しかしながら、CAZは72.7%, PCG, CERおよびCCLは68.2%, FOMは50.0%と低い抗菌性を示し、TOBでは全く効果はみられなかった。

今回、口腔領域感染症患者から分離された細菌74菌株に対して、最も高い抗菌性を示した抗菌薬は、IPM/CSであった。また、PIPC, CMZ, FMOXおよびOFLXは90.5~94.6%と高い抗菌性を示した。なお、ABPC, CDTR-PI, CFTM-PI, CAM, LCM, MINOは82.4~89.2%の抗菌性であった。しかしながら、PCG, CER, CCL, CAMの抗菌性は71.6~79.7%と低く、TOBでは31.1%と非常に低い抗菌性を示した。

## 8. 音波歯ブラシによるプラーク除去効果

○鈴木 昌彦・初山 正敬・小島 寛・北後 光信  
白木 雅文・渋谷 俊昭・岩山 幸雄

(朝日大学歯学部口腔感染医療学講座

歯周病学分野)

### 目的

最近、プラークコントロールに対する意識が高まり、それに伴って電動歯ブラシの興味も高まっている。その理由として電動歯ブラシは短時間で容易にブラッシングができ、プラーク除去効果が高いと考えられる。特にブラッシング時間はプラーク除去効果に影響を与える大きな要因と考えられる。そこで本研究は音波歯